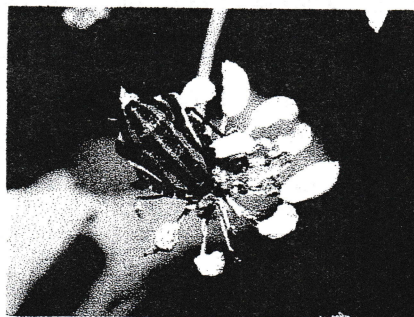


ミシマサイコ

ミシマサイコ (三島柴胡)



ミシマサイコ



アカスジカメムシ (害虫)

ミシマサイコ (せり科) 生薬名「柴胡」・別名「和柴胡」

日本薬局方：サイコ・BUPLEURI RADIX

学名：ミシマサイコ・*Bupleurum faicatum* Linne' セリ科(Umbelliferae)

基源：ミシマサイコに対する学名はかなり混乱しており、いまだに定説がない *B. faicatum* L.の変種であるとする分類学者の説、中国産柴胡の原植物とされている *B. inense* DC.も同じく変種とする説、・・・したがって、基原植物としてはこれらを含む。

『神農本草経』の上品に「茈胡」の原名で収載されている。「茈(し)は紫(し)と音じ、茈胡の茈は柴(さい)と音じる。若いときには食用とし、老ゆれば採って柴(しば)とする。それゆえ苗は山菜、茹草の名があり、根は柴胡と名づけられる」と記されている。

産地：分布は分類にもよるが、広くアジア大陸から西はヨーロッパの一部、北はシベリヤの一部まで広がる。しかし薬用として分類上使われているミシマサイコは、日本産、中国産、韓国産が主である。

中国産：「唐柴胡」(津柴胡・・・天津から輸出の名)*B. falcatum* L. と同一種との説もあるが *Bupleurum* 属は葉形が変化しやすく定かではない、ヒロハサイコ、ダブリアサイコ(*B. dahuricum*)を基原とすると・・・マンシュウミシマサイコ(北柴胡 *B. chinense*) ホソバミシマサイコ(南柴胡 *B. scorzonaeifolium* Willd)輸出されている。

韓国産「山柴胡」野生種であるが今は殆どないといわれている。

「植柴胡」は栽培品で日本に輸出されている。「竹柴胡」と呼ばれるものは、オオホタルサイコ、ホタルサイコ系で、セリ科ではあるが薬用とはしない。

「銀柴胡」はナデシコ科で別の植物である。

日本産：わが国においては関東以西が主で、千葉県(安房)、神奈川県(丹沢)、静岡県、愛知県(三河)、山口県(秋吉台)、高知県、九州(霧島、阿蘇、湯布院、平尾台) など太平洋側の日当りの良い、温暖な低山丘陵地帯の草原、原野、低木林に野生種が他草と混生し、しばしば群生する。
(昭和初期までは関東地方の山地、丘陵の草原に多く野生種が自生していたと伝えられている)現在は、静岡県東部の山野にわずかに自生しているのみで、ほとんど絶滅し、幻の薬草と言われている。(ミシマサイコの名が知られるようになり、絶滅危惧種の調査などから僅かではあるが、自生している場所が見られるとの報告がある)。

静岡県：箱根西麓、三島、函南、大仁、修善寺、中伊豆、伊東(大室山)、天城(猫越)、稲取、南伊豆(波勝)、下田(縄地、爪木崎)、松崎(岩科)、御殿場、小山、富士山麓。

ミシマサイコは薬草として古くから民間でも使われ、自生地 of 農家では柴胡の根を掘る道具が最近まで残されていたようである。

伊豆柴胡、鎌倉柴胡とも呼ばれ、鎌倉でもよく自生していたと言われる。

一般的に漢方生薬として利用されているものは、日本における栽培品と、韓国産栽培品、中国産栽培品であり、品質は日本産がより優れている。

しかも、栽培品は二年株となる初秋頃より、根腐病で枯死してしまうものもかなりあり、品質、成分ともに野生品には及ばない。

ミシマサイコは貴重な薬草であり、野生品は高価で取引されて、乱獲のため殆ど絶えてしまった。

静岡県三島に集荷されていた地元の、ミシマサイコの自生地である県東部の丘陵地、低山地には現在も小さな群生が見られる。しかし、山の手入れや、環境の変化で数年のうちに絶滅すると思われる。

薬効：医学、薬学、検査、分析学の進歩により、ミシマサイコの広範な薬理作用が知られるようになった。特に自然界の植物(民間薬草)については、世界的に研究が盛んである。

肝障害改善作用、抗消化性潰瘍作用、抗炎症性作用、抗アレルギー作用、ステロイド様作用、脂質代謝改善作用、糖質代謝改善、抗腫瘍性作用、免疫向上作用、抗ストレス作用、等。

一般的には単品では投薬されないが、解熱、鎮痛、鎮静、頭痛、解毒、強壮、上気道感染症、胃炎、胃・十二指腸潰瘍、肝炎、胆嚢炎、黄疸、肋膜炎、間歇熱、マラリヤなど広く、薬効、治療など期待されている。

用法・容量：「根」3～9gを一日 三回に分けて食間に煎服する(水 400ml で半量になるまで煎じ、煎じ滓を取り除く) 又、粉末 3～5gを一日 三回に分けて食間に服用する。

(解熱、鎮痛、解毒、消炎、強肝、胃炎、胆嚢炎、肝機能障害、マラリヤなど)

本来、漢方処方に配合されて使われる以外、柴胡を単剤では使わない。

注意：H8年柴胡剤で副作用の起きた例がある。がん治療でIFNと併用厳禁。

ミシマサイコ (せり科) 生薬名「柴胡」・別名「和柴胡」

形態 : せり科、双子葉植物離弁花の多年草

全株 : 無毛で草丈約 40~100cm、直立して茎は瘦せて堅く上部でジグザク状に分枝する。

葉 : 根生葉の基部は細く葉柄とあわせて長さ 10~20cm。緑色。

茎生葉は互生で細く広線形か線形で鋭尖頭、側脈は上向き数条の平行脈があり、全縁硬質、葉柄との境は明らかでないが約 6~10cm で多少鎌形に湾曲している。淡子緑色。

花 : 8~10 月頃、茎頂に小形の複散形花序をつくり 5~10 個の小さな黄色の花をつける。総苞片は小さく披針形、小総苞片は総苞片より大きく 5 枚あり、広披針形鋭頭、花弁は 5 枚で中央より内側に曲がる、雄しべ 5 本、下位子房がある。(小花柄 5~10 本、花柄 2~7 本)

果実 : 分果は卵球形で無毛、長さ 2.5mm~3.5mm、横断面は五角形、油管の数は多い。

根 : 黄褐色で太く、側根、細根を伴う。

採集・調製 : 2 年以上の株を、秋から冬かけて根を掘上げ、水洗いし茎を切り離す。天日乾燥し、生乾きのときに手で軽く揉み、細根を取り除き更に天日乾燥する。乾燥歩留まりは約 30% である。

側根は重要なので大切に扱う。

収穫を目的とする栽培品は、開花期前に草丈の育成に応じて数回摘心する。

2 年目の株を 8 頃の花前、蕾みの時に痛めないように上手に摘花して、根の肥大化をはかる。薬用に刻みとして、密閉容器に入れ冷暗所に保存する。

成分「根」 : トリペルテン系のサポニン配糖体・・・サイコサポニン saikosaponin.(サイコサポニン a, c~f, a 及び d のアセチル体)、これに対応するサイコサポニン a, c~f 及びそのゲニンであるサイコゲニン E~G.(サイコサポニン b はサイコサポニン d からの二次的生成物)

サポニンの含有は根の基部と側根に多くあると言われる。

フラボノイド配糖体・・・(ルチン、6-グルコシル-4',5,7,8-テトラヒドロキシフラボン等)

糖類・・・(アドニトール adonitol)

ステロール類・・・(α -スピナステロール、 α -spinasterol 約 70%、スチグマステロール及びその誘導体)

脂肪油・・・(ステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、パルミチン酸、リグノセリン酸)

ミシマサイコ「三島柴胡」 栽培について

環 境：出荷用に生産する場合でも、家庭園芸としても、ミシマサイコの独自の自然環境が重要であり、自生地が最適である事は言うまでもない。気候温暖で、夏、秋の適度な雨量があ、地下水位が低く、標高があまり高くない低山、丘陵地が望まれる。又、日当たりがよく風通しの良い、水捌けの良い場所での育成が良い。

土壌は火山灰質、腐植質、砂質土壌など、山地原野では多少土質が悪く溶岩瓦礫などでも、環境が良ければ結構生育する。

播 種：種子は2年以上の株から採集したものが発芽率がよく、丈夫に育つ。

(2年株になると秋頃から根腐病を起こすので、播種前に土壌消毒をする)

3月～4月頃、(秋播き10月頃)。裸地に畦幅60cm～80cmに畝をつくり、元肥(堆肥、腐葉土、鶏糞、油粕、苦土石灰、化成肥料等)を施し、表土をならし種子をまばらに播く、(発芽状況によっては5月頃追播種) 覆土は約10cm

発 芽：種子の状態により若干差が見られるが、30日～50日で発芽する。

発芽率は50%～70%程度で気候条件により結構左右される。(畑などでの連作は不適である) 雑草に弱いので常に除草に心がける。

時々浅く中耕すし10cm株間ぐらいに間引きをするが、はあまり好ましくない。追肥は6月～8月頃、月に一度化成肥料など。

根を肥大させ、収量をあげるために草丈に応じて、年7回ぐらい摘心する。

又、2年目の花は咲かせないように、蕾みのときに摘花する。

畑地に直播する以外に、苗床を作り播種育苗してから、畑に移植する方法もあるが発芽率は良いが、育成にむらが出る。

収 穫：2年生の秋～初冬にかけて地上部を刈り取り、根を痛めない様に深めに掘り起こし水洗いして日干しする。生乾きの状態で細い髯根を除く。更に日干し調製する。乾燥歩留まりは約27%。(髯根も薬用として使える)

栽培では2年以上経つと殆ど枯死してしまい、採算が取れないので2年根が生薬として出まわっている。自然界に自生している5～6年根とは成分に大きな違いがあると思われる。

保 存：虫の予防や、香気を大切にするため、密封容器に入れ、湿気のない涼しい場所に保存する。

柴胡 「ミシマサイコ」 漢方薬としての立場から

生薬としては、中国最古の薬物書(後漢時代)「神農本草經」に上品として収載されている。

漢方医学の三陰三陽で言う少陽病の主薬である。(傷寒論)

「少陽期で邪が半表半裏にあり、往来寒熱と言われるような悪寒、発熱、を反復。胸脇苦満といわれる季肋部の膨満感や、抵抗、圧痛、重苦しさ。足の少陽胆経の要薬で、肝、胆、心包、三焦の相火をふるい起こさせ、働きを良くする。また証により胃腸障害やアレルギー症状の改善」

効能：少陽部の邪を発し、熱を退け、結気を散じ、経血を調え瘧を治す。

解表、疎肝、升堤、抗瘧。

柴胡は少陽胆経の要薬である。肝胆は表裏の臓であって、また肝経にも入る。その効能は胆を清め、肝を疎し、表裏の熱を和解する。李時珍は「手足の少陽へ行らすには黄芩を補佐とし、手足の厥陰へ行らすには黄連を補佐とする」といっている。「少柴胡湯のように少陽病で、胸脇苦満、往来寒熱を治すには黄芩を配合する。また肝鬱、血閉、目昏障翳には常に黄連と一緒に用いる」。醋制にしたものは能く活血、上痛の作用がある。「四逆散」や「逍遙散」のように白芍、甘草、当帰などを配合して脇疼痛、月経不順を治す。酒制にしたものは、よく升気、止瀉の作用があり、瘀血と混和して虚熱を退ける。李東垣の「補中益気湯」は柴胡を補佐薬として用い、胃気を鼓舞し、清陽、上行の効がある。また気虚で熱があり清ならざるの症を治療する。これは正を扶け、邪に達するの方である。

日本では柴胡の配合された漢方薬を特に柴胡剤と言い、慢性疾患や体質改善等、治療にも幅広く応用されている。

漢方薬：柴胡が処方されている漢方薬は以下の通り。

小柴胡湯、大柴胡湯、柴朴湯、柴胡桂枝湯、柴胡桂枝乾姜湯、加味逍遙散、柴胡加龍骨牡蠣湯、柴胡清肝湯、荊芥連翹湯、補中益気湯、神秘湯、柴苓湯、柴陷湯、乙字湯、十味敗毒湯、柴胡芍帰湯、柴芍六君子湯、四逆散、疎肝湯、柴胡枳桔湯、解勞散、抑肝散、柴葛解肌湯、
(証や病状に応じ、各処方に漢方生薬を 1~2 剤加味したり、去ったりして、加減 処方としても応用する)。

ミシマサイコ「三島柴胡」の園芸栽培

種の採集： ミシマサイコの2年以上経った株から秋に種を採集する。

充実した種は発芽率がよく丈夫に生育する。種の保存は冷暗所がよいが、冷蔵庫でもよい。

播 種： 3月～4月上旬。秋蒔きは10～11月。

鉢植え(ポット、プランター)は環境に合わせて移動できるので都合がよい。

鉢の選定＝水捌けと通風を考えると、素焼きの鉢がよいが、日当りの良い所での乾燥し過ぎに注意が必要である。無釉薬の焼きしめ鉢などもよい。

大きさ＝深さは「根」が10cm～18cmになるので深めのものが良い。

用 土＝排水性、保水性を考慮し、ゴロ土、培養土、腐葉土、赤玉土、パーミュキュライト、パーライト、など選び混合する。

庭に直播する場合は、水捌けと日当りの良い場所を選び、状況に応じて深く耕しゴロ土や、培養土、混合した山野草土を適度に入れる。

市販の種まき、育苗培土、山野草の土は軽石、鹿沼土、パーミュキュライト、パーライト、根腐防止剤など混合され排水、保水の条件がよく、これに赤玉土、黒土を補充すれば鉢植え、セルトレイなどでも使いやすく無難である。

元肥＝堆肥、鶏糞、化成肥料、苦土石灰など。 追肥＝6～7月頃、化成肥料。

用土が出来たら上面を平らにならし、土に冠水し種をまばらに播く、覆土は8mm～10mmくらいにかけ、表土が乾ききらないように、播いた種が出ないようにジョウロで冠水する。鉢は水に漬け下からしみ込ませる。

管 理： 発芽は種により若干の差があるが30日～50日ぐらいで発芽する、発芽率は50%～70%くらいであるが条件により相当の差がある。発芽後は、乾燥や過度の湿気に注意して、充分に日が当たるようにし表面が乾いたら水をやる、水のやり過ぎはよくないので注意する。

草丈が10cm以上になるまでは雑草に大変弱いので、柴胡の根を痛めないように常に除草する。20cm以上になると、上部でジグザグ状に何本も分枝するので、支柱を立てて倒れるのを防ぐ。花季にアブラムシ、赤スジカメムシに注意する。寒さには結構強いが、凍らないように根元を保護する。夏の乾燥も防げる。花季が終わり種が落ちる頃には地上部は変色し枯れ、次年度の根生葉が伸び出す。



開花期のミシマサイコ

